

クリニカル・クエスチョンで考える 外傷整形外科ケーススタディ

土田芳彦・編

【評者】 野坂光司 (秋田大学大学院准教授・整形外科学)

B5判・368頁
2024年3月
定価：11,000円
(本体10,000円＋税10%)
ISBN978-4-260-05321-1
医学書院 刊



史上最高の外傷整形外科テキストでした。全368ページでしたが、飽きのこない小説のようで、あっという間に読み終えました。

さすがは「日本の外傷整形外科の巨人」土田芳彦先生の作品です(テキストというよりは作品と呼んだほうがしっくりくる内容です)。共同執筆は土田先生の薫陶を受けた4人の若き外傷整形外科医(若武者)たちです。本書は、若武者が整形外科外傷に立ち向かう際、さまざまに抱かれる疑問、戦い方(治療方針)と考察が提示されます。それに対して一つひとつ、百戦錬磨の軍師(指導医)が丁寧にその戦い方を説き、そして熱くディスカッションしているかのように進んでいく様が小気味よかったです。

全体を通して、質の高い症例報告であり、手術手技書であり、エビデンスに基づいたレビューであり、最新の治療アルゴリズムも取り上げてくれています。そして医学書であると同時に深い哲学書であり、エッセイです。さらに全体として入門編であり、応用編であり、要点と盲点までが見事にぎっしりと詰め込まれていました。

四肢外傷から小児、骨盤骨折の8つの大項目があり、各項目は細分化され、症例提示、クリニカル・クエスチョン、文献考察と、臨床家の視点という土田先生の解説が詳しく書かれています。そして、小項目には土田先生により計45個のコラムが書かれています(これが実に面白く、秀逸です)。

本書の特長として、手術中の展開時の外観写真や整復操作の透視画像などがふんだんに盛り込まれていて、視覚的にもわかりやすいことが挙げられます。どんなに綿密に術前計画を立てても、う

まくイメージできないことがあり、論文やテキストを見ても詳しいところまでは書かれていないことが少なくありません。本書は「見たかったそのイメージ」がこれでもか、これでもかと散りばめられています。

トッパナイフの手術見学をし、こういうやり方があるのか！と目からうろこが落ちることがあります。難治症例に悩み、苦しいとき、症例報告の一枚のX線によって道が開けることがあります。本書はその連続でした。

コラムの一つに「アルゴリズムに従って治療する危険性」というものがありました。「アルゴリズムは基本的に二者択一で進んでいくが、この選択が曖昧である。また、アルゴリズムに当てはめようとして、思考が停止している医師に遭遇することは多い。原則に立ち帰らなければならない」という内容です。これにはハッとさせられ、難治症例ほど患者さんへの愛と、治療者のしっかりとした哲学の大切さを改めて感じました。

治療の最適解へのアプローチ指南書として、私を含め、整形外科外傷に携わる第一線の外傷医には必携本ですが、コールドサージェリーしかやらなくなった先生、外来しかやらなくなった先生にもぜひ手にしていただきたい一冊です。忘れかけていた熱い魂を呼び起こされると思います。読み物としても読み応えがあります。「百聞は一見に如かず」です。

重度四肢外傷を治すプロフェッショナルである土田先生の生き様を見せられた気がしました。常に歩みを止めず、より良い方法と環境づくりを探求し、進化し続ける大切さが溢れていました。